



# カリキュラムの定義と重要性

## —カリキュラムの見直しで授業が変わる—

信州大学教育学部  
附属次世代型学び研究開発センター  
森下 孟

[morisita@shinshu-u.ac.jp](mailto:morisita@shinshu-u.ac.jp)



# 本教材のねらい

- ・「カリキュラムを見る力」を育てる
- ・なぜ学校全体でカリキュラムを考える必要があるのか
- ・明日からの授業改善につながる視点を持つ



# カリキュラムとは

- ・「年間計画」「単元配列」だけではない
- ・学校全体で提供する学習経験の設計図
- ・子どもが“どんな力を身につけるか”まで含めたトータルデザイン
- ・授業はその一部



# カリキュラムの5つの柱

1. 子どもの姿から決める 学習目標
2. 目標に合わせた 教材・資料
3. 子どもが動く 学習活動・指導方法
4. 目標に合った 評価の仕方
5. 子どもを支える 学習環境 (ICT・教室文化)

**この5つのつながりが保てているかが重要**



# なぜ学校全体でカリキュラム？

- ・子どもの多様化
- ・ICT・生成AIの急速な広がり
- ・探究・協働・主体的な学びの重視
- ・学力差・家庭環境・校種間接続の課題

**個々の授業だけでは限界！**

**学校全体の設計が必要**



# 教員間のばらつきを減らす

- ・ 同じ学年でも「やり方」「進度」「評価」がバラバラになりがち
- ・ 子どもにとっては不公平感
- ・ 目標と評価を共有すると授業の質が安定する

**学年・教科で共通言語を作ることが大切**



# 子どもが学びやすい環境に

- ・発達特性・背景・言語・家庭環境の違い
- ・より多様な子どもが同じ教室で学ぶ時代
- ・UDL(UNIVERSAL DESIGN FOR LEARNING)の視点：
  - －提示の仕方を工夫
  - －活動方法を複数用意
  - －表現方法の選択肢をつくる

**事前の設計(カリキュラム)で対応可能**



# 質保証と学校としての説明責任

- ・保護者・地域・教育委員会への説明責任
- ・「なぜこの活動?」「どんな力がつく?」
- ・児童生徒のデータや学習ログを活用

**学校全体でPDCAを回せる体制をつくる**



# 教員の専門性が高まる

- ・共通カリキュラム：授業研究の議論が深まる
- ・互いの授業の良さが見えやすくなる
- ・若手支援・異動者支援にも効果

**職員室に「共有知」を増やす**



# 顕在的・潜在的カリキュラム

- **顕在的(見える部分)**
  - 指導計画・単元構成・教材・評価規準
- **潜在的(見えないが強い影響)**
  - 学校の雰囲気
  - 暗黙のルール
  - 子どもへの声かけの文化
  - 時間の使い方
- **ヌル・カリキュラム**
  - 扱わない領域にも意味がある(例:金融教育・ICTリテラシーなど)



# カリキュラムの3つのレベル

- 国家レベル: 学習指導要領, 到達目標
- 学校レベル: 学校の教育目標・授業方針
- 授業レベル: 個々の単元・教材研究

**レベル間がつながっているかを点検する**



# 教育工学的アプローチ

- ・ 実務で使える考え方
- ・ 授業を「設計→実施→振り返り→改善」の循環で捉える
- ・ ADDIEモデルは授業改善の基本
- ・ 子どもの実態から目標を設定し,逆算で活動を決める

**明日からの授業準備にも使える考え方**



# データを活用した授業改善

- ・ つまずきポイントの分析
- ・ 課題の共通傾向を把握
- ・ 単元レベル・学校レベルの改善に活かす

**「経験と勘」+「データ」の両輪で改善促進**



# 羅生門的アプローチ

- ・ 現場で大事な感覚
- ・ 同じ出来事でも、子ども・保護者・教員で受け止め方が違う
- ・ 「成功」と言われる取組でも負担になる子がいる
- ・ 課題の背景には価値観の違い・文脈の違い

**多様な声を聞く姿勢が学校改善の起点に**



# 2つの視点を往還する学校づくり

- ・工学的：構造化・標準化・改善サイクル
- ・羅生門的：多声性・主観・個別性への配慮



**再構成のキーワード**

**「仕組み」と「声の拾い上げ」の両方が必要**



# まとめ

- ・カリキュラムは学校全体の“学びの設計図”
- ・一貫性・多様性・質保証・専門性向上の軸に
- ・工学的視点＆羅生門的視点の往還：これから  
の学校づくりに不可欠

まずは

**「自分の学年・教科のカリキュラム点検」**

から始めてみる